

ありのままの個性

線を引く。土をこねる。糸を縫い付ける。

誰にも縛られることなく、ただ目の前の素材と向き合う。

2分で完成する作品もあれば、5年をかけて未完の作品もある。

やまなみ工房には、89の個性が集う。

毎日を笑顔で過ごせる場所へ やまなみ工房独自の試み

アートセンターの3階では、10人ほどが机に向かっていた。キャンパスの前で体を揺らす大柄な男性が目止める。「1分に1回、1時間に1回、ときには1日に1回、目の前に立てかけた紙をぼんと叩くんです」と、施設長の山下完和さん。キャンパスには、すでに30本ほどの縦線が描かれている。膨大な時間に息をのむ。

1986年の開設当時、やまなみ工房は自閉症や知的障害がある人たちの共同作業所だった。利用

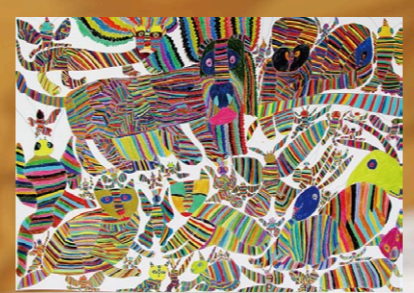


障害者多機能型事業所
やまなみ工房 施設長
山下完和さん

者3人は、単価10円に満たない軽作業を毎日こなす。ある日の作業中、当時一般職員だった山下さんは、男性が拾った紙に絵を描く様子を見た。「僕は、描かれたものに對して何の魅力も感じませんでした。でも、描いている顔、指先を見ると、作業をしていた時とはまるで別人のようにニコニコしていたんです。毎日『がんばれ』と励まされ、仕事を急かされる日常は、本当に彼らが望んでいることなんだろうか。それは僕らの価値観であって、僕らが望んでいるだけじゃないか、と思いました」

1990年、やまなみ工房は新たなスタートを切った。求めたのは、就労や賃金ではなく、利用者が一日を笑顔で過ごせる場所だ。「何をすれば楽しく過ごせるか、それがいまも続いているだけです。アートをしようとか、障害者は芸術に長けている、とも思っていま

2008年から所属する岩瀬俊一さんは、ペンをういて人物や動物を描く。モチーフを決めた後、余白を埋めるように描き込んでいく



「どうぶつ王国」
2019 / 紙、水彩顔料ペン、色鉛筆 / サイズ767×1087mm



せん。僕たちスタッフは、利用者本人が幸せでいられることを追求してきただけなんです」と山下さんは続ける。

施設は今年で35年目を迎える。

利用者は送迎バスで施設にやってくる。午前10時半から活動を始める。活動拠点は、敷地の中央に位置するアートセンターの2階と3階のほか、アートセンターを囲むように建つ複数のアトリエだ。主に紙や布、陶土を使い、心のおもむくまま創作活動にいそしむ。中には数メートルにも及ぶ巨大

な作品になった例もある。「制作物はすべて保管していますが、作り終えた物に一切執着しないのが彼らの特徴です。そもそも、僕たちがアートと呼んでいるだけで、彼らにとっては、ご飯を食べることや歯を磨くことと同じ、一日の行為なんです」と山下さん。

こうした作品は「アール・ブリュット」や「アウトサイダー・アート」と呼ばれ、世の中で高い評価を得ている。利用者の作品のうち、100万円以上で取引される例もめずらしくない。また、有名アーティストのCDジャケットや、アパレル製品のデザインにも取り入れられるなど、その用途は広が

り続けている。

やまなみ工房の活動は、各界のアーティストの共感を呼んできた。施設内の一室を利用して、これまでに泉谷しげるさん、宇崎童童さん、押尾コタローさん、藤巻亮太さんなどがライブを開催。また、施設の利用者をファッションモデルにベルギーの写真家ロブ・ワルバースさんが撮影した様子は、やまなみ工房での暮らしを描いたドキュメンタリー映画『地蔵とリビドー』（笠谷圭見監督・2018年公開）にも収められている。

「障害者はまだまだ、社会の中で、かわいそうな人たち、不幸な人たちだと思われがちです。でも、

そうじゃない。彼らはとてもハッピーで、ユニークな人たちであり、彼らにしかできない魅力的なことがたくさんあるんです。望まない作業を続けるよりも、やりたいことをやって、それを彼らのお給料に替えていければ」と山下さんはほほ笑む。

アートセンター3階には、ひときわ大きな声がこだまする。「風船ほしい、風船ほしい」。声の主は32年前、拾った紙に絵を描いていた三井啓吾さん。指先につけた絵具で色とりどりの風船を描き続け、その数は3千枚にのぼるといふ。この日もキャンパスを前に、澄んだ大きな瞳を輝かせていた。

やまなみ工房のアーティストを一部紹介



「目・目・鼻・口」
2012～ / 陶土 / サイズ最小100×70×70mm、最大520×160×170mm

吉川秀昭さん
作品に10cmほどまで顔を近づけて制作する。一見、抽象的な模様のように見える点の集合体は、数えきれないほどの「顔」である。独自の法則に従い、一定の間隔を保ちながら「目、目、鼻、口」の順に、丁寧に点を刻んでいく。目を凝らしても構成を捉えられないほどの細かさである。



「妖怪」
2018 / ボール紙、マーカーペン、色鉛筆 / サイズ735×825mm

鶴飼結一朗さん
休憩時間に眺める大好きな図鑑から、昆虫や動物、恐竜などを題材に描く。描き方は独特で、モチーフの一つ描くと、その絵に重なるように同じ対象の生物を次々と描き、重なるにつれ奥行きが生まれる。動きや表情はそれぞれ異なる。絵画だけでなく、陶土を使った立体作品にも取り組む。



「五色の色とその他の色」
2007
綿刺繍糸、綿布 / サイズ750×650mm

田中乃理子さん
長年、縦に縫うことを繰り返して作品を生み出している。決まった五色もしくは七色の糸を一組として使用し、一筋ごとに色を変え、隣に沿わせ縫い進めていく。始めと終わりには返し縫いをする。目のそろった緻密な縫いは、布の端から端へと帯状に広がり、やがて布一面に施される。



「正己地蔵」
1992～
陶土 / サイズ約60×100×60mm (1点)

山際正己さん
1990年に入所した頃は、学校時代に学んだ皿や器などしか作ることができなかったが、施設におけるさまざまな体験や共に過ごす仲間からの影響を受け、次第に作品も個性豊かな立体造形へと進化していった。代表作の「正己地蔵」は20年以上も制作を続け、数十万点を超える。

INFORMATION



やまなみ工房
☎0748-86-0334
甲賀市甲南町葛木872
※コロナ禍のため、現在は見学者の受け入れを休止中

カフェ デベツ
やまなみ工房内 アートセンター1階
営業時間 10:00～18:00
定休日 日曜・祝日(土曜は不定休)

- ① 卵黄をのせた近江牛の甘辛和風デベツ・バーガー (1,320円)
- ② 近江牛の特製キーマとほうれん草のあいかけカレー (1,320円)
- ③ カフェは40席を備え、アートに囲まれてゆったりと過ごせる
- ④ 工房で生まれた作品を常設展示するギャラリー (入場無料)

アートセンター1階のカフェデベツでは、アートを楽しみながら地元産の食材を使ったメニューを味わえる。店内では、国内外で高い評価を得ている山際正己さんの地蔵(1体550円)をはじめ、信楽の陶芸スタジオ[NOTA&design]とコラボした食器類などが購入できる。ギャラリーにもぜひ足を運んでほしい。

